

龍谷大学佛教文化研究所新報

第36号

◇研究ノート1

龍谷大学図書館蔵中世歌書について

大取 一馬

龍谷大学図書館の中世の貴重歌書の多くは写字台文庫に収蔵されている。写字台文庫の四十人集の私家集をはじめ、勅撰集、歌学書、連歌書がそれである。他に、新収書の中にも新古今、新勅撰集の貴重書の類も見られる。その中、四十人集は、小澤蘆庵の工房で書写された私家集の集成で、そのほとんどが平安時代の私家集である。この中、兼行集のみは中世の私家集である。また、写字台文庫の隆信集、愚見抄、九代抄、をはじめ詞源要略、制小点詞、和歌会席、光岡百首、自讃歌注、詞字注、湯山三吟等の歌書は中世の歌書として貴重なものである。この中、四十人集や詞源要略、和歌会席はすでに龍谷大学善本叢書として解説を付

けて刊行したので、ここでは愚見抄、詞字注、光岡百首、九代抄、自讃歌注の五点についてこれまでの調査に基づいて貴重書としての意義を報告したい。

まず、「愚見抄」は、「歌の読みかた」「定家卿読方」等と別名のある鎌倉期の歌学書で、愚秘抄・三五記・桐火桶などと共に藤原定家に仮託された蜀燈系偽書の一つとされているものである。その内容は、本とすべき歌のさまの論、諸体論、詠歌技法論、秀歌例、歌人評などを得いたものである。鎌倉中期以降の歌論史的状况が反映されている歌書である。

龍大図書館所蔵本（図書番号〇二一・三四三）は、縦二六・七センチ、横二〇センチの袋綴本で、墨付一三丁の比較的

短かいものである。一二丁ウラから一三丁オモテにかけて次の奥書が見られる。

建保四年十月十三日終功守

遺老藤原朝臣定家判

弘長第二之膳南呂中句之候

以祖父黃門自筆本書写之

藤原朝臣為氏

應永廿七年十月十四日以秘本令

書写之訖可秘々更不可出匣中

深可祇之

文正元年十一月廿四日寫之訖

文明六年三月廿四日

相傳真増

右の奥書の中、「文正元年十一月廿四日寫之訖」までは本文と同筆で、その後の「文明六年三月廿四日 相傳真増」の相伝奥書は別筆である。つまり、文正元年（一四六六）に書写されたものを貞増なる人物が文明六年（一四七四）に相伝し、所持していたことを示している。

「愚見抄」の諸本は、時雨亭文庫本をはじめ、東北大学附属図書館蔵三春秋田家旧蔵本、早稲田大学図書館本等があり、本文異同を主な基準にしてⅢ類に分類されるが、龍谷大学図書館本は第Ⅰ類甲本に分類できる。また龍大本の価値は現存最古の文正元年の書写奥書を有することと共に書写奥書により伝来経路が明らかに出来る点にあり、その点で貴重本といえる。

次の「詞字注」（図書番号九一・二〇六、四二）は墨付五〇丁で、墨付一丁表

に「写字台之蔵書」の長方型と丸型の蔵書印二夥を捺す写本である。「詞字注」は、他に類のない孤本である。当該本は、「祖師手向」「禁中御会歌書」「詩歌会」「俊成九十賀記」の四書と共に一冊に合綴されている。「詞字注」の内容は「古今集」から「新古今集」までの八代集の歌三二二首を抄出し、春・夏・秋・冬・恋・雜の六部立に部類し直し、それに注釈を施した勅撰集歌の注釈書である。末尾に次の奥書がある。

ま

此一冊、從古今始之代々集のうち所々の詞注之

尋取仰尊命いなひかたて注付奉る者也、定壁

案可待五恥云々、

延徳三年秋八月日

宗祇四

此一冊去年夏比堺ニ在津之時、奥州塩

穴

実相院哥道執心之条、数日相語守、以

第志被

見させられし訖、然リ令書写者也、可

秘々々

天文十四年乙巳五月日

主源尹

隆朝臣

加本書写仕候者也

右の奥書によれば、室町期の連歌師宗祇の著した注釈書であったことが知られる。当該本は延徳三年（一四九二）宗祇によって著されたものを、天文十四年（一五四五）の五月に源尹隆が書写し、そ

の後更に書写された写本ということになる。宗祇の勅撰集注釈としては、東常縁講釈の聞書である『古今集兩度聞書』の他に、『新古今和歌集聞書』『十代拔書』が知られているが、八代集の注釈をしたものとしては本書以外には知られていない。

その注釈のあり方を古今集の二・三の歌の注について『古今和歌集兩度聞書』と比較してみると、次のとおりである（兩度聞書の本文は片桐洋一著『中世古今集注釈書解題三』の本文によった）。

A（詞字注）

袖ひちてむすひし水の氷れるを
春立けふの風やとくらん
ひちてはひたして也むつましく
する心也

（兩度聞書）

袖ひちて結びし水のこはれるを春
立つけふの風やとくらん

此歌よく時の巻頭にあたる也。
実に朝日の心在之。心は夏のほ
どたづさはりつる水の氷るさ
まも其興はさることにて待つる
を、春きたりて東風吹とくさま
など、たちかへり心もめづらか
なる心也。又袖ひちてとは、大
かたは、ひたす也。但むつまし
く也。四季をよめるなどいふ事
は不用之。只光陰のうつる由也。
むつまじき人のおもはずへだ、
りぬるも又むつまじくなる世の

B（詞字注）

五月待山郭公打はふき今日もな
かなんこそその古こゑ
郭公のなかとて羽をひろくる
をいへり

（兩度聞書）

さ月まつ山ほととぎす打はふき今
もなかなんこそそのふるこゑ
打はふきは、なかもとて羽をひ
らくやうにするを云。又は、あ
まねき心ともいへり。五月まつ
は、卯月なり。

C（詞字注）

天河紅葉を橋にわたせばや七夕
つめの秋をしもまつ

秋ことにわたる河なれば紅葉を
はしにわたすやと云心也紅葉の

橋とはなき也此歌を吟て実方
も天河かよふ浮木にこと、はん
紅葉の橋はちるやちらすやと読
り是より又紅葉の橋とて有やう
にも読り

（兩度聞書）

天河紅葉をはしにわたせばや七夕
つめの秋をしもまつ

秋ことのかよひなれば、紅葉を
橋にわたせばやと云り。紅葉の
橋とてあるにはあらざるべし。

（傍線筆者）

右の両者の比較から見ると、古今集歌
の注釈では、多くは『古今和歌集兩度聞

書』の注を援用していることが知られる。
全体の注釈のあり方は、語の意味や一首
全体の歌の心をはじめ、縁語等、修辭の
指摘を主としている。注釈するに当たっ
ては定家の『顯注密勘』や『假案抄』の
注を採用している場合も多く見られる。
また、次に例示する古今集歌「しらなみ
の」注では、定家を尊崇し、その学説
につらなることを強調するような注釈も
見られる。

しらなみの跡なきかたを漕舟も
風ぞたよりのしるべなりける
白波は跡なきといはん為也。跡
なきかたに漕舟も、風のたより
有ことをわが思ふ人のゆかりな
どのあるに、これにこそ我思を
もつたへいはめとすこしたより
の出来心也。又云、跡なきかた
に行舟も風ぞたよりのなる物を、
吾意にはたよりのなきともいへ
り。清輔の奥儀抄には此儀也。
以前の理は定家卿の注也。何も
同事ながら定家の説をもつて当
流の理とする也。

これまで宗祇の八代集の注釈書は知ら
れていなかったが、その奥書と注釈内容
から検証すると、当該の「詞字注」も宗
祇の勅撰集注釈書の一つに加え得る書で
あり、その意味で貴重なものと考えられ
る。

また「光闌百首」は、「顯賢百首」とも
呼ばれ、蓮如の子蓮誓の第九子顯誓（兼

順、光闌坊とも）の百首歌である。この
『光闌百首』はもともと光闌坊顯誓のもう
一つの著作『今古独語』兩冊の上巻とし
てまとめられたもので、顯誓が安心相達
の讒を受けて播磨の英賀に没落を命ぜら
れていた間の、永祿十年（一五六六）十
月から十二月の間に詠まれた詠歌である。
『今古独語』の文中にも

こ、に十月廿日、予が病傷はれゆく
暁、往事を思ひ、和歌を詠吟す。そ
れより同き廿五日にいたるまで、漢
和をまじへ、十三首所解の趣き筆に
まかせてしるす。その、ち廿八日よ
り、時々の頓作を書あつめて、九十
九首にをよび、先百首に一首をのこ
し、筆をさしをき待る間、信秀来て
いはく（後略）

と本百首の成立に関する記事が見られる。
九十九首に一首を加えて百首としたこと
については、二河譬の人寿百歳に准じた
ものであることが本百首の巻末に記され
ている。また、作者顯誓が和歌の道に入
り、歌を嗜むようになったことについて
も、本文中で次のように回顧している。

予イトケナカリシ時トクサケヨ（千
代ヲコ）メタル春ナレハト梅ノ花ヲ
ヨミ侍シソノコトノ葉ヲアハレミ敷
嶋ノ道ニス、メ入給ソレヨリハシメ
テ三十一モシノコトノ葉ニ心ヲカケ
イマ老ノ後ノナクサミトナリ侍ルユ
カリノ露モカウハシクムカシノ風モ
ナツカシウ覚侍ウヘ御オト、小倉大

納言季種卿ニ論語ノ訓説ヲ（ウ）ケ
奉和哥ノ道マテモカタリ出タマヒ遣
遥（院内府ノ）御点ナト申ウケ侍シ
古ノ事マテヒ（トリコト）シテカキ
ツケ侍ルナラン

これによると顯誓は、かつて逍遙院三
条西実隆の添削も受けたことがあるらし
く、直接中央歌壇の歌人ともつながって
いたことが知られる。本百首には、弥陀
による救済を信じて疑うことのない顯誓
の、弥陀に対する信敬慕慕の思いを直接
詠みあげたものが多い。龍谷大学本（図
書番号〇二一・二二七）の仮綴本は、欠
損部分、及び判読不明箇所が多いが、天
正十四年（一五八六）の現存最古の写本
であり、貴重である。

次に『九代抄』は、室町期の連歌師牡丹
花肖柏の撰集した勅撰集の秀歌撰である。
文龜三年（一五〇三）一〇月の成立
で、後撰集から続後撰集に至る九つの勅
撰集から秀歌を選び、春・夏・秋・冬・
恋・雜の六つの部立に再編成したもので
ある。これには歌本文だけのものと、そ
れに加注されたものとの二種がある。龍
谷大学本（図書番号〇二一・三四一、二）
は歌本文だけの零本で、室町後期に書写
された写本である。本文は、春部と、夏
部の前半を欠いていて、夏部の途中の次
の歌から始まっている。
花なれやと山の春の朝ほらけ嵐にか
ほるみねの白雲

式子内親王

たかさこの尾上の桜たつめれば宮こ
のにしきいくへかすみぬ
本書の末尾には次の肖柏の元奥書が見
られる。

右一冊從後撰集至続後撰集遮眼
銘肝之作書者一千五百首九代抄也
送春鐘尺秋漏而閑窓勒之專為老
懶之難堪博覽又思童蒙之不及深
求耳

文龜第三曆孟冬上旬弄花軒肖柏

『九代抄』の諸本は片山享氏が奥書の
署名や歌順の異同等を基準にして三類に
分類されているが（片山享『九代抄』に
ついて）『甲南国文』第二八号・一九八
一年）、同『九代集抄』解説（『九代集
抄』、古典文庫第四三五冊、一九八二年）、
それによると、龍谷大学図書館本は東洋
文庫岩崎本、宮内庁書陵部本等と同じく
第三類のA系統に分類されている。龍谷
大学図書館本は春部と、夏部の一部とを
欠く零本ではあるが、その書写時期が成
立時期に比較的近いものであり、室町期
書写の数少ない伝本である点で貴重であ
るが、その他に、歌に付されている注記
から第三類本の原初形態を知り得る写本
でもある点で貴重な伝本と考えられる。

最後の『自讃歌注』（図書番号〇二一・
三五七）は、『百人一首』と合綴された袋
綴の一冊で、表表紙見返しに長方形の
「写字白之藏書」の朱の藏書印が捺され
ている。裏表紙見返しには次の奥書がある。
此一本雖為秘本依所望書写畢

于時明応五年二月八日

自讃歌は、後鳥羽院以下の新古今当代
歌人一七名各一〇首の、計一七〇首の秀
歌撰である。撰者は後鳥羽院とされて伝
わっているが、未詳である。これに室町
時代以降多くの注釈書が著されるが、そ
の中、当該本は冷泉持為の門弟であった
木戸孝範（生没年未詳、文龜二年（一五
〇二）以後没）の著した注釈書である。
木戸孝範の『自讃歌注』は、その伝本が
十本程度現存していて、広本系・略本系

に分類されているが、龍大図書館本は広
本系に分類される。当該本は、奥書を含
め全で一筆で書写されており、明応五年
（一四九六）当時の書写本として認めてよ
いように思われ、著者孝範の在世時の書
写本として貴重な伝本といえる。
以上、龍谷大学図書館蔵の中世歌書五
点の書写本について調査結果を略述して
きた。その理由は各々に異ってはいるが、
この五点は学術的な意味で特に貴重な中
世歌書と言い得るものである。

◇ 研究概要報告 ◇

平成二十四（二〇二二）年度本研究の研究計画は、指定研究二件（継続一、新規
一）、共同研究四件（継続二、新規二）、常設研究三件（継続一、新規二、特別指定
研究三件（継続三）、そして個人研究二件（新規二）が設置され、合計十四件の研究
プロジェクトが構成された。次に示すような具体的な計画のもと、総研究員数二二二
名の協力によって推進される。

研究成果として、『佛教文化研究所紀要』第五十一集に共同研究ほかの六編ならび
に恒例の本研究所講演会の講演記録を収めた。仏教文化研究叢書としては、『日本仏
教史における神仏習合の周辺（責任編集者 赤松徹真氏）』が出版された。また龍谷
大学善本叢書の『西本願寺宗意惑乱一件史料第一巻』（責任編集者 平田厚志氏）と
仏教文化研究叢書の『大乘莊嚴經論』第四章の和訳と注解―供養・師事・無量とく
に非無量―（責任編集者 能仁正顕氏）の二冊もまもなく出版される。これらは、
永年の研究成果によるものである。

A 指定研究（龍谷大学図書館蔵の貴重書の研究・出版）

1、日本語日本文学 龍谷大学図書館蔵中世歌書の研究（二年度）

主任・大取 一馬 研究員三六名

（研究の目的）

本プロジェクトの一年目では善本叢書に収めるべき典籍「光
剛百首」「愚見抄」「詞字注」「後鳥羽院自讃歌注」「九代抄」の